

けいゆう病院

河原由恵

けいゆう病院は正式名称を「神奈川県警友会けいゆう病院」といいます。昭和9年に、山下公園の裏手で「神奈川県警友会警友総合病院」としてその産声をあげました。皮膚科も開設当初より（当時としては当然ですが）、皮膚泌尿器科として診療を開始しております。平成8年1月より現住所のみなとみらい地区に移転し、「けいゆう病院」と名称変更しました。

筆者は「警友総合病院」の時代も半年勤務する機会があり、また横浜生まれの横浜育ちですので、子供の頃から旧病院は見慣れた景色の一部でした。いかにも昭和初期竣工の大変おもむきある重厚な造りの建物で、今は2棟あった建物のうち1つは取り壊されて駐車場となってしまったのが残念です。時々前を通ると懐かしく思い出します（大雨の翌日医局



スタッフ（前列左より市川医師、筆者、松井医師。後列は皮膚科外来の看護師さん、助手さん）

の机上の本がずぶぬれになっていたこと、裸電球1つしかないホラー映画の撮影に使いそうなロッカー室、床板を踏み抜きそうになったことなど古い建物ゆえの貴重な体験も枚挙にいとまがありません……）。

さて、平成8年にみなとみらい地区でスタートした新病院は旧病院とうって変わって、近代的な建物となりました。通常のビルの形の外来棟と半円筒型の病棟よりなり、中は吹き抜け構造と大変スタイリッシュです。観光施設、商業施設、高層マンションが林立している場所ということもあってか、初めて見た人は病院とは思わないことも多いようです。病室はほぼすべて海に面しており、ハワイ旅行のパフレットなどで言うところの“オーシャンフロント”もしくは“オーシャンビュー”です。実は筆者も一昨年ほんの数日入院することになってしまったのですが、窓から広い海やベイブリッジが見えるのは、患者さんにとって随分なぐさめになっているのだな、と実感いたしました。また、大部屋も4人定員、各部屋シャワー・トイレ付きで、患者さんにて



病院の外観

きる限り快適な療養環境を提供しています。そのせいか、数ヶ月前に雑誌“読〇ウ〇ークリー”の特集記事“患者2万人アンケート 行きたい病院・満足した病院”で、当院が横浜市でのあこがれ度第2位病院にあげられていました（現実の満足度はというと案の定ランクダウンですが……）。

現在皮膚科スタッフは常勤3人です（筆者河原と、松井はるか医師、市川尚子医師。最近の皮膚科にありがちな全員女性）。皆様ご存じのように、実には在職27年余、神奈川県皮膚科医会の前会長でもある菅原信先生が、昨年9月に退職されました。その後はパートの先生のお力も借りながら、3人でパワーダウンしないよう頑張っております。一番若手の市川先生は育児時短勤務中ですが、このような形で勤務する女性常勤医師は病院としてはじめてで、次に続く人たちのためにも皮膚科が風穴をあけたかなと思っています。外来では看護師さん、助手さんも女性ばかりですので、多忙中ごくわずかな息抜きの時間には料理の話などで盛り上がることもしばしばです。

外来患者数は平日平均約120人で、みなとみらい線が開通した平成16年以降はやや増加したように思います。旧病院時代からのなじみで通ってくださる患者さんも多いようです。また、コンスタントに近隣の連携医療機関からご紹介もいただいております。再診に関しては30分きざみの予約制をとっていますが、なかなか時間通りに診療が進まないのは悩みの種です。外来には、無影灯付きの小オベ対応ベッドが2台、全身型紫外線照射装置（narrow



病棟の皮膚科処置室

band UVBではなく、UVA/B）、Qスイッチアレキサンドライトレーザーを備えています。入院患者数は平均7、8人ですが、時に14、5人ということもあります（病院自体は410床です）。

皮膚科は他科との境界領域疾患を診察することや併診を依頼されることも多いですが、できる限り快くひきうけ、また他科との連携を密にするよう努めています。ここ数年代表的なところでは、某科にて診断がつかず困っていた amyopathic dermatomyositis、POEMS 症候群、Churg-Strauss 症候群を当科で診断するなど、自己満足かもしれませんが、存在価値をアピールできていると考えています。

日常の診療をこなすのに精一杯ではありますが、院内においても地域においても役に立てる守備範囲の広い皮膚科をめざし、日々スタッフ一同努力していく所存でありますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

独立行政法人国立病院機構 横浜医療センター

坪井廣美

横浜医療センターは、戸塚区原宿町に国立横浜病院として診療を開始し、最近国の方針によって独立行政法人国立病院機構・横浜医療センターと改名しました。現在は戸塚区・泉区・瀬谷区・保土ヶ谷区、藤沢市、逗子市、綾瀬市等にお住まいの患者さんを診療しています。当院は病診連携という方針のもと、近隣の先生からのご紹介・逆紹介を推し進め、地域

の連携病院としての役割を担っています。特に皮膚科では、戸塚区や瀬谷区、泉区、藤沢市、綾瀬市の診療所・医院の先生達からの紹介が増えております。

研修制に関してですが、当院の研修医が数ヶ月間、皮膚科の研修にきています。また専門医養成のための研修施設の1つとなっているため、北里大学から派遣医師が毎年きます。現在外来は医師3名、看護



左より松井、百瀬、坪井、矢部（看護師）

師1名で診療しています。医師は坪井・松井矢寿恵・百瀬葉子先生、看護師は矢部幸枝さんです。また西5病棟というところが皮膚科病棟です。松井先生は大学病院のあと国立横浜・横須賀病院などで研修しており、一昨年より当院に赴任しています。親身で明るく元気に診療をされています。百瀬先生は大学でたくさんの重症患者さんの治療をしていて、力強い医師です。矢部さんは国際医療センターで働いた後、当院にきました。効率よくやさしく皮膚科をまもっています。

私は2004年4月から当院皮膚科に赴任しました。今迄は、北里大学病院、国立横須賀病院、東京都多摩老人医療センターなどの病院で研修・診療してき

ました。以前、この病院が国立病院だった時に、勝岡憲生先生のもと3人スタッフの2番手で赴任しました。今回は2回目の赴任です。当時、臨床や組織所見のわからない患者さんに関しては、上の先生に相談したのですが、親切・親身なご指導を受けました。現在、当院にて自信をもって診療できることは勝岡教授ほか大学の先生方に教えていただいた為と感謝しております。

この病院は、駐車場や看護学校、研修医棟などの各施設があります。その施設間にはたくさんの桜の木が植えられており、大きく成長しています。私たち医師

は4月に相模原方面から赴任することが多いため、国道16号の渋滞をやっとの思いでぬけて、この病院にたどり着きます。多くの派遣医師達は、満開の桜の木にかこまれた大きな病院を、その後目にします。また去る時も、桜に囲まれて他の地に赴任していきます。病院とはいえ、この桜のためか、ここは情緒にあふれ落ち着いた雰囲気に囲まれています。また、患者さんにとっても、病苦があるとはいえ、この風景は入通院の楽しみの1つではないかと思えます。このようなよい環境で、医療に貢献することは大変光栄です。また、近隣の先生方の後方支援病院として機能する様、今後も努めたいと思えます。ご指導よろしく願いいたします。

帝京大学医学部附属溝口病院

清 佳浩

溝口病院は田園都市線高津駅から徒歩2分と駅の目の前にあります。病院の創設は昭和48年と古いため、現在外来新棟の設計が開始されており、2年以内に出来上がる計画です。

溝口病院皮膚科は初代久木田淳先生、2代目安藤巖夫先生に続き、平成18年2月に清佳浩が3代目科長として赴任いたしました。

常勤医が3名とこぢんまりした科ですが客員教授、非常勤医師、修練生などトータルすると10名

ほどで診療、教育、研究を行っています。その中で一番力を入れているのが診療で、地域の先生方からの紹介は随時受け付けており、難解な症例は月曜昼間に症例検討会、回診等を行い、また、病理や放射線科、麻酔科と連携をとりながら治療方針を立てております。一月のうち1週間ほどは5年生の2～3人のグループが臨床実習に回ってきます。

診療体制

月曜、水曜、木曜、金曜日は午前9：00～12：00、午後14：00～17：00の間で一般診療を行っています。再診は予約制ですが、予約がなくても急患や予約外として随時対応しています。火曜の午後は手術日で外来や中央手術室での手術を行っています。月曜と金曜日の午後は美容外来をピーリングやレチノールの外用などを中心に行っています。Narrow band UVBを用いた紫外線療法やイボ冷凍凝固術は毎日診療の中で行っており、スクワリクアシドを外用する局所免疫療法も毎日行っています。土曜日は午前中のみ一般診療を行っています。特殊外

来を開くほど診察ブースがありませんのでアトピー性皮膚炎、尋常性乾癬、自己免疫疾患や悪性腫瘍患者も一般診療の中で扱っております。

外来紹介

5名だけが写っている写真を掲示しましたが、外来診察室で写しました。人物の後方に見える液晶テレビは症例写真や病理組織、直接検鏡の顕微鏡映像、ダーモスコープ所見、写真台帳や培養台帳な



前列左が清佳浩、右が小林めぐみ。後列左から武重陽子、高橋栄里、助川のぞみ

どすべてのデーターを提示するモニターとして使用しています。

医師紹介

清 佳浩 (せい よしひろ)：助教授。皮膚科全般（アレルギーから腫瘍まで）、脂漏性皮膚炎、真菌症、爪疾患、脱毛症

滝内石夫 (たきうち いわお)：客員教授。皮膚真菌症、熱傷の局所療法、皮膚の感染防御

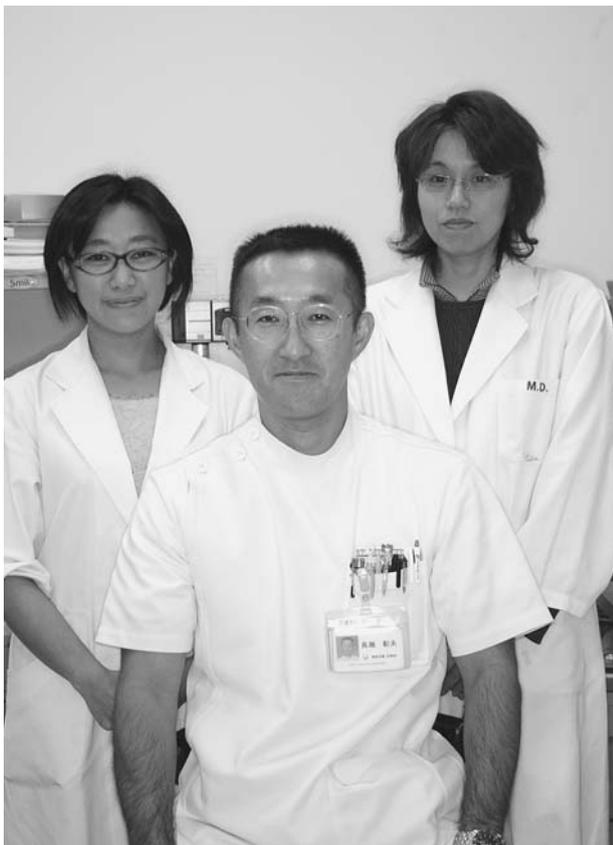
大和市立病院

長瀬彰夫

大和市立病院は大和市の北部、国道246号線、渋滞の名所である東名大和トンネル近くに位置し、厚木基地が近くにあることもあり時折、離発着陸の飛行機の轟音が響きわたります。皮膚科の病棟は6階にあります。回診時病室からは横浜のランドマークタワー、丹沢山系から頭を出した富士山を見ることが出来ます。最寄駅は小田急線鶴間駅で大和市役所の隣で徒歩15分、バス5分位で着きます。皮膚科は昭和49年に設立され、渡辺義一、鎌田直子、花岡宏和、村上通敏諸先生が、順次非常勤医師として当科を支えてこられました。昭和52年4月、宮田(向井)千珈子先生が初めて常勤医師として着任

され、昭和54年6月に退職されています。その後、私の前任の新井春枝先生が昭和54年6月から平成16年度までの26年間勤められました。大和市立病院皮膚科の歴史=新井先生の足跡ということになると思います。直接指導を仰いだ事はありませんが、大学医局の大先輩であり特に膠原病の研究、著書を拝見するに当たりその業績には舌を巻くばかりです。その偉業を見てしまうと、自分が引き継いでやって行けるのか甚だ不安になるばかりです。

外来診療は月曜から金曜日までの週5日の午前中で、午後は外来手術や皮膚生検、病棟処置、往診を行なっています。入院が必要な手術は月曜日の午後



左より徳永千春先生、中央筆者、右・鈴木典子先生

に行なっていますが、整容の問題がある場合や大きな手術は北里大学病院、昭和大学藤が丘病院・横浜市北部病院などの形成外科に紹介させていただいています。年間の生検、手術件数は400件前後です。また、レーザー、デルマレイは予算の問題もあり保持していないため、治療が必要な患者さんは北里大学病院皮膚科などに紹介しております。

大和市立病院皮膚科は現在、常勤医2人、非常勤医2人の計4人で診療を行なっています。若輩者である私を支えてくれる頼もしいスタッフを紹介します。

徳永千春常勤医師。平成6年北里大学卒。大学医局の2年後輩になるが、大和市立病院勤務は6年と

なり医師年数もそう変わらず経験も豊富なため、特に気を配らなくても仕事を進めてくれ非常に頼りになります。そのやさしい人柄と丁寧な診察で患者さんのみならず、職員のファンも多い。夫の単身赴任の家を支える一児の母でもある。

鈴木典子非常勤医師。平成4年山梨医科大学卒。同年北里大学皮膚科入局。私と同期である。4年の勤務の後、結婚を期に退職。週1回のパートでの外来勤務以外は3人の育児に忙しい日々を送っていました。昨年の4月に皮膚科専門医の資格を取る研修をしたいと申し出を受け、5月より平成18年度一杯の限定勤務です。同期の先生に臨床、病理、治療や論文執筆の指導をするのは不思議な気分ですが、鈴木先生も割り切って接してくれており良く働いてくれます。平成19年度からは、週1回のパートタイムとして働いていただく予定です。

矢口厚非常勤医師。平成元年北里大学卒。やぐち皮膚科クリニックの院長で患者も多くご紹介頂いています。貴重な休診日の1日を削り、月1回診療に来て頂いております。臨床、病理も相談させていただいており、非常に助かっています。

筆者。平成4年、北里大学卒後、同大皮膚科入局。茨城県鹿島労災病院で3年勤務後、一昨年4月より医長として勤務しています。のんびりとした生活にどっぷりと漬かっていた為、体や脳細胞の再活性化に少々時間が掛かりましたが、周囲の助けもあり何とか科を支えております。趣味は筋トレ、テニスですが、昨年からの体調不良のため自重気味です。

以上のメンバーで忙しくはありますが、きめ細やかで患者の満足度が高い診療を行なって行きたいと頑張っています。これからも、最新の知識を吸収しつつ市民の皆様、近隣の先生方のお役に立てる皮膚科を目指して行きますので、宜しく願いいたします。

皮膚科外来診療（平成19年4月より）

	月	火	水	木	金
長瀬(AM)	初診	再診	再診	再診	初診
徳永(AM)	再診	初診	初診	初診	再診
鈴木(AM)		初診、再診			
PM	入院手術 病棟	検査、手術 病棟、カン ファレンス	検査、手術 病棟	検査、手術 病棟	検査、手術 病棟

独立行政法人国立病院機構 相模原病院

朝比奈昭彦

国立病院機構相模原病院の歴史は古く、昭和13年に臨時東京第三陸軍病院として発足しています。戦後の昭和20年に厚生省に移管され、国立相模原病院と改称されました（ちなみに、第一陸軍病院は現国立国際医療センター、第二陸軍病院は、現国立成育医療センターです）。昭和51年には臨床研究部も設置され、平成11年、厚生省より政策医療の免疫異常（リウマチ、アレルギー疾患）分野における高度専門医療施設（準ナショナルセンター）に指定されています。場所は、小田急相模原駅から徒歩で15分ほどの住宅地にあり、米軍相模原住宅にも隣接し、座間米軍基地からもそれほど離れていません。

私は、この相模原病院に平成17年4月に赴任しました。もともと横浜市立大学の関連病院として、歴代の医長および医師が派遣されておりましたところ、川口博史前医長が一身上の都合で急遽退職されることとなり、私が後任として派遣されることとなりました。大学院を卒業したてで気心も知れた、優秀な藤田英樹医師も常勤医として私と一緒に働いてくれることとなり、相模原病院で臨床研修を終えたレジデントの先生との計3人で、新しいスタートを切りました。私は、これまでほとんどの期間を大学病院で過ごし、外来の出番も多くはなく、相模原病院での診療に明け暮れる毎日は、洗礼と言えるものでした。医長不在の期間がしばらく続いたため、改めて体制を立ち上げる必要もあり、環境の違いにも大きく戸惑いました。毎日がめまぐるしく過ぎていく中で、秋にはレジデントの先生が休職（その後退職）となり、秋から冬にかけては、仕事を2人体制でこなしました。その後、平成18年4月からレジデントが1名増員され、大学から新たに、入局したての甲斐浩通医師と山本瑞穂医師がチームに参加しました。そのおかげで余力が生まれましたが、同時に患者さんの数

も増えたため、忙しさは変わりません。

相模原病院は、病院の性格上、アトピー性皮膚炎や蕁麻疹を主訴に紹介されたり、あるいは自分で調べて相模原病院に照準を合わせて受診してこられる患者さんも少なくありません。原因を知りたい、として、皮疹がないのに受診されることもしばしばです。こうした患者さんで、とくに他院で治療されているような場合は、診察と納得のいく説明にかなりの時間がかかります。また、とくに奇をてらった治療をしているわけでもありません。毎朝早めに診療を開始するようにしていますが、外来はすんなりと終わらず、間髪いれずに午後には、検査、手術に加えて、他科の入院患者さんの診察や往診が待ち構え、一息つくともどりは真っ暗です。ただし、外来、入院患者さんともに、疾患のパラエティーは極めて豊富で、相模原に来て初めて目にしたり、診断した疾患も少なくありません。そういった意味では、やりがいがあり、非常に勉強になります。私以外は任期が過ぎれば交代となるため、寂しさはあります。

私が赴任したのは、ちょうど国立病院が独立法人化されて2年目で、独法化以前との比較は自分では出来ませんが、事前に聞いていた状況とはかなり異なるものでした。毎月のように診療にかかわる数字



病棟スタッフとともに

を出され、皮膚科の個別事情はあまり酌量されません。診療実績を上げるためにも現場に張り付いていることになり、せっかくの研究センターに足を伸ばせません。相模原病院はハード面でもかなり遅れており、病棟は昭和40年前後の建物で、オーダーや処方箋、予約はいまだに手書きです。しかし、ようやく、このたび病棟の改築計画が実現し、平成20年初旬の竣工を目指して動き出しました。今後の発展を楽しみにしています。

私はずっと横浜に育ち、横浜市歌を小学校の校歌

代わりに歌い、横浜の中学、高校に通い、大学時代も毎日、横浜の実家から東京まで通っていたほど、神奈川にどっぷりつかっています。医師になってからも、ほとんどの期間を神奈川から通い続けました。さらに偶然とは不思議なもので、私が生まれた病院は、この相模原病院です。今後は、相模原病院皮膚科の、臨床、研究でバランスのとれた展開を期待するとともに、神奈川の諸先生方のご指導ご鞭撻を是非とも賜りたいと存じますので、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

